敦煌寫經總目索引

日本黃檗山萬福寺藏

陳智超　韋祖輝　何齡修　編

中國國家圖書館
敦煌文獻編號專用章

陳智超　韋祖輝　何齡修　編

日本黃檗山萬福寺藏

旅日高僧隱元中土書信集

日本國　大本山黃檗山萬福寺監寺
黃檗宗宗務總長　乾隆俊題

中華全國圖書館文獻縮微複製中心

隱元禪師像

羣山拱壽星

乾隆正傳三十二世

黃秉陞元如

原始要終松壽

黃秉陞元如

總目

序　大槻幹郎……三
序言　陳智超……一三
隱元所收中土來信篇目……三五
隱元所收中土來信……四三

附錄

紀年對照表……五二五
隱元年譜（節錄）……五二七
清初福建軍事政治大事記　何齡修編……五三七
參考書目略……五五七
人名索引　陳智超編……五六一
隱元與日本黃檗宗　韋祖輝……五七五
隱元信件的史料價值　何齡修……五八九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

PDG

序

大槻幹郎

一六五四年(清順治一一、南明永暦六、日本承応三年)、福建省福州府福清県清遠里の黄檗山万福禅寺住持であった隠元隆琦と、随従の主僧十人等の一行が、六月二一日厦門を出帆し、七月五日夕刻長崎に到着した。船は鄭成功の貿易船団の、所謂国姓爺船を用意されたものと思われる。

隠元はこの年六十三歳、黄檗山初住六年五箇月の後、再住して九年五箇月を経た年であった。この間黄檗山に於ける隠元は、伽藍を一新し、一大叢林となした。多くの僧侶と郷紳居士の帰依をあつめ、順治八年の冬安居には、千人の僧衆が参堂したという。

当代の黄檗山は、臨済禅の復興を目指した明末の禅匠密雲圓悟から、その法嗣費隠通容、法孫隠元隆琦へと三代に渉り受け継がれ、臨済正宗を標榜していた。従って隠元の東渡は、明末臨済宗の正統禅を、日本に広布することになるのである。

ところで、隠元が日本に渡航することになったのは何故であろう。それは古来よりの日中の深い交流の歴史的背景と、当時日本の鎖国制度の中での貿易事情にあった。唯一の貿易港長崎には、貿易に関係する中国人(唐人)が居住し、日本の宗教政策に従って、檀越として寺院を営んでいた。出身地に従って長崎唐三箇寺、また三福寺と呼ばれる興福寺、崇福寺、福済寺で、各中国人の僧侶が住持していた。この中崇

福寺の住持を本国から招請するに当り、興福寺に渡来していた無心性覚が、旧友の隠元の法嗣で、羅源県の鳳山報国禅寺也嬾性圭を推薦した。ところが応諾して出航間もなく、遭難して水没してしまった。そこで長崎唐寺では、長老の興福寺逸然性融が主となり、その師隠元を再三にわたる懇請の結果、三顧の礼に加え、愛弟子也嬾の不測の事故ではあったが、果されなかった責を負うとして応請した。後に本師費隠通容への書信の中で、「日本之請、原為嬾首座弗果其願、故再聘於某、似乎子債父還也」と述べている。かくして僧衆、檀越等の慰留に、三年の滞留を約して東渡したのである。

当時明朝滅亡による混乱から、日本へ避難亡命する人士もあり、南明の抗清と郑成功等の日本への乞師が行われ、政治的・軍事的にも複雑な状勢の下にあった。隠元渡来の年は、郑成功が福建の海岸線をほぼ制圧していた時期であった。これらの点当地のこの前後におけるる詳しい状況については、研究を望むところである。

隠元の東渡を迎えた日本では、「祖師西来」とも捉え、多くの僧が隠元の会下に参じた。渡来以前すでに『隠元禅師語録』が輸入されており、「黄檗隠元」の存在は認識されてもいたのである。隠元に参じた僧たちは、三百年来の大善知識の到来として、当時の仏教の沈滞を振起することを願う人々であった。中国に留学して明師に参じ、日本仏教に清新の気を吹き込んできた歴史があるところから、中には渡航を企図した僧もあったが、国禁のため果せないでいた。ところが唐土からの禅匠の渡来は、正に祖師西来ということであったわけである。

京師花園妙心寺の竜渓宗潜、禿翁妙周、竺印祖門らは、洛西の古刹妙心寺住持招請まで企図した。これは内部の反対から成功しなかったが、畿内摂津富田の慈雲山普門禅寺への招請を幕府に交渉し、渡来の翌年九月には普門寺に移り、日本僧の参禅を二百人に制限する程、隠元会下への参集があった。竜渓らは新たに意図し、隠元を日本に留めて一寺の開山とし、新たな禅宗教団を結成する為、幕府にその許可を求めて奔走する。隠元は故国での約束を実行するため、帰国を度々希望するが、竜渓はこれを止め、終に将軍家綱への謁見に成功した。このことは隠元を開山とする一寺創建の決定を確実なものとした。

一六六一年(寛文元)八月、隠元は唐和多くの僧を従えて進山した。寺は旧を忘れないため、黄檗山万福寺と命名された。ここに臨済宗黄檗派(のちに黄檗宗)と呼ばれる新教団が出現し、その本山の開創をみたのである。そこで福建の黄檗山を唐黄檗また古黄檗、これに対し新黄檗と呼ばれた。

ここにおいて、隠元は終に故国に帰ることなく、八十二歳の生涯を終える。以後新黄檗は、隠元の法子法孫によって承け継がれ、約一世紀にわたって中国僧が住持することとなった。

隠元東渡以後、新黄檗開創の前後故国を往還し、また渡来する僧もあり、なお便船に託して書信の来往があった。この中に黄檗山の僧や檀越居士達から、隠元の帰国を促す書簡が多くみられる。これらの書信の総てではないが、新黄檗には隠元宛

に送られて来た諸和尚・諸居士からの尺牘が、五巻の巻子本にまとめられて遺存している。今度、陳智超先生によって、これらの書信に詳細な注釈を附し、故国に於て公刊されることとなったのである。

この書信集が公刊されることとなった契機は、年来の畏友杉村英治先生が、東皐心越の調査のため来日中の陳先生を案内して、黄檗山に宿泊され、文華殿に於て五巻の書信を開閲されたことに始まる。この中に郑成功と推定される無署名の書簡を見出し、帰国后『人民日報』その他に報告された。この時内容の重要さから、共同で内容を検討し、成果を日中共同出版することが出来ればという話も出たが、機が熟せず、結果先ず陳先生が、中国側の文献によって研究を行い、独自に公刊されることとなった次第である。なおこの刊行に当っては、杉村先生の御尽力援助によって結実したことを記しておかねばならない。

本書信の刊行は、当時の人事交流・文化交流を今日に甦らせることである。今日日本に於て、近世江戸時代文化における中国文化の摂取について、新たな関心と再評価が行われつつある。ここに隠元の東渡を契機とする黄檗禅の成立が、大きな役割りを果したことを改めて見直されてきている時期にある。このための研究史料として、また日中文化交流の史料として、その意義は大きいものと考える。また時宜を得た公刊というべきであろう。尚、陳先生は『清初僧諍記』の著者陳垣の令孫である。この著作は密雲円悟の法嗣費隠通容、木陳道忞らの論諍に関した研究で、黄檗への関

心は宜なりというべく、これ又人を得たというべきである。ここに本書信の歴史的背景と、公刊への由縁の一端を聊か述べて、本書の成立を慶賛したい。

終りに本書信の公刊に賛同された黄檗山当局に対し、なお陳先生の御努力と杉村先生との友情の上に成就したことに深甚の感謝を捧げる。それは正に、日中友好の歴史の一頁ともなるであろう。新黄檗の成立と展開は、宗教的分野のみに留まらず、広く日中文化交流の歴史の中でも、極めて特徴的な顕現であり、その研究も今後に俟つところが大きい。本書の出版を契機に、両国の研究が更に進展することを期待して、陳先生の懇請に図らずも応じることとなった責めを果し、小序にかえたい。

一九九四年九月五日

黄檗山下の小廬に於て

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

譯文

一六五四年(清順治十一年、南明永曆六年、日本承應三年)，福建省福州府福清縣清遠里黃檗山萬福禪寺住持隱元隆琦及隨從主僧十人等一行，于六月二十一日自厦門出航，七月五日晚到達長崎。他們乘坐的是鄭成功的貿易船隊，即所謂國姓爺船。

隱元當年六十三歲，他先曾在黃檗山六年五個月，後來又再住九年五個月。由于隱元的經營，黃檗山伽藍一新，成爲一大叢林。衆多僧侶及鄉紳居士歸依，順治八年結冬時，參堂僧衆達千人。

當時的黃檗山，由于以復興臨濟宗自任的明末大禪師密雲圓悟、其法嗣費隱通容、法孫隱元隆琦三代相繼經營，以臨濟正宗爲標榜。由于隱元的東渡，使臨濟正宗在日本廣爲傳播。

隱元爲何東渡日本？它既有自古以來日中深入交流的歷史背景，也同當時日本鎖國政策下的貿易活動有關。在當時唯一開放的貿易港口長崎居住的從事貿易的中國人(唐人)，按照日本的宗教政策，以檀越的身份建造寺院。按他們的原籍，在長崎興建了唐三寺，即總稱爲『三福寺』的興福寺、崇福寺、福濟寺，并以中國僧侶爲住持。當崇福寺需從中國招請住持之時，興福寺的無心性覺舉薦他的舊友隱元的法嗣、羅源縣鳳山報國禪寺的也嬾性圭。然而，應邀的也嬾在東渡途中遇海難身亡。興福寺的逸然性融，是長崎唐三寺衆僧中的長老。在他的主持下，三次懇請也嬾的本師隱元。隱元爲完愛徒之願，毅然應請，所以他在後來給本師費隱通容的信中說：『日本之請，原爲嬾首座弗果其願，故再聘于某，似乎子債父還也。』對于黃檗僧衆、檀越的慰留，隱元與他們約定三年還山，然後東渡。

當時中國的政治、軍事形勢複雜。由于明亡而引起的混亂，有人亡命日本以避難，還有南明的抗清，以及鄭成功等向日本乞師。隱元東渡之時，鄭成功控制了福建沿海一帶。關于當地在此前後的詳細情況，甚望加以研究。

在日本方面，視隱元之東渡爲『祖師西來』，衆多僧人在隱元會下參拜。因爲在此之前，《隱元禪師語錄》已傳入日本，『黃檗隱元』之名也爲人所知。在參拜隱元的僧人中，不少人寄希望于隱元這位三百年來的大善知識，期望他能振興處于沉滯狀態下的日本佛教。歷史上，日本僧人到中國留學、參拜明師，曾爲日本佛教帶來清新之風；而這時企圖去中國留學的僧人，又因鎖國而不能實現，因此他們把從中國來的大禪師看作是『祖師西來』。

京都花園妙心寺的龍溪宗潛，禿翁妙周和竺印祖門，原擬請隱元爲洛西古剎妙心寺住持，因內部反對而未能實現。于是又向幕府交涉，請住畿內攝津富田的慈雲山普門禪寺。在隱元來日次年的九月，他移住普門寺，當時限定參禪的日本僧人不得過二百人。龍溪等人又爲一個新的計劃而向幕府請求，即留隱元在日本爲一所寺廟的開山，建立新的禪宗教團。雖然隱元爲履行三年歸國之約而多次表達回國之願，終因龍溪謁見家綱將軍而使建寺開山之事落實，從而中止了隱元的回國。

一六六一年(寬文元年)八月，隱元在衆多中日僧人的隨從下進山。爲表示不忘舊寺，仍名黃檗山萬福寺。從此出現了稱爲臨濟宗黃檗派(後稱黃檗宗)的新教團，并開創了本山。因此稱福建的黃檗山爲唐黃檗或古黃檗，而日本的則稱爲新黃檗。隱元最終沒有回到祖國，終年八十二歲。此後，新黃檗由隱元的法子法孫承繼，由中國僧人任住持的情況延續了將近一世紀。

隱元東渡以後，新黃檗開創前後，既有返回祖國、也有東渡日本的僧人，還有托便船携帶的來往書信，其中有許多是古黃檗衆僧及檀越催促他回山的書信。這些書信雖然没有全部保留下來，但現在新黃檗仍收藏有諸和尚、居士寫給隱元的一些來信，分裝爲五卷。此次由陳智超先生加以詳細的注釋，在隱元的祖國出版。

這部書信集出版的契機，始于去年。畏友杉村英治先生陪同來日本調查東皋心越資料的陳先生，住于黃檗山，并閱讀藏于文華殿的這五卷書信。陳先生在其中發現了一封無署名的信，推定作者爲鄭成功，回國後在《人民日報》等刊物上發表。鑒于這批書信内容的重要，陳先生建議由日中雙方共同研究并出版。由于時機尚未成熟，故先由陳先生根據中國方面的文獻進行研究，并先在中國出版。同時應該指出，由于杉村先生的盡力支持，使此事得以落實。

本書信集的出版，使當時日中的人員交流和文化交流又在今天顯現出來。在今天的日本，對近代江户時代文化從中國文化中吸取營養一事，正給予新的關心和再評價。以隱元東渡爲契機的黃檗宗的建立，在其中起了很大作用，應予重新評價。作爲研究這一問題的史料，作爲日中文化交流的史料，它的意義重大。本書信集的出版是非常及時的。再者，陳先生是《清初僧諍記》作者陳垣的令孫，這部著作關于密雲圓悟法嗣費隱通容、木陳道忠等論諍的研究，應該説也與黃檗有關，因此可以説由陳先生出版本書信集，也是適得其人。以上簡述本書信集的歷史背景和出版緣由，以祝賀本書的完成。

最後，我要深切感謝支持本書出版的黃檗山當局，以及陳先生的努力和杉村先生的友情。這也

正是日中友好史的一頁。新黃檗的創立和發展，不僅是在宗教領域，而且在更廣闊的日中文化交流史中顯現出極鮮明的特徵。對此的研究，有俟于今後。我還期待着以本書的出版爲契機，日中兩國的研究更有進展。應陳先生的懇請，謹作此小序。

一九九四年九月五日

于黃檗山下之小廬

（陳智超譯，黃正建校）

序言

陳智超

本書收錄了日本宇治市黃檗山萬福寺珍藏的旅日高僧隱元隆琦所收書信一一七通。除一通爲隱元赴日前所收，二十七通爲隱元弟子赴日後所發外，其餘八十九通均爲隱元東渡後中土僧俗人士給他的信件。寫信的時間自一六五二年至一六七一年，歷時二十年。我們還在《隱元全集》中收集到了隱元的部分復信，附于原信之後，故名『來往書信集』。

一

明清之際，隨着政治形勢的急劇變化，大批中國僧人東渡日本，形成高潮，隱元隆琦是其中影響最大者。不僅如此，在兩千多年的中日文化交流史中，隱元也占了重要的一席。他不僅在日本開創了黃檗宗，他和他的弟子在書畫、篆刻、建築、雕塑、醫藥、飲食、印刷等方面都有傑出成就，在日本產生了深遠影響，『黃檗文化』名聞日本。

隱元一生可分三大階段。

第一階段：明亡以前（一五九二——一六四四）。

明神宗萬曆二十年（一五九二）十一月初四，隱元生于福建省福清縣靈得里東林（今上逕鎮東林村）林姓家庭，父名德龍，母龔氏。德龍有三子，隱元最幼。隱元六歲時，『父客于楚』，至今兩湖一帶，從此杳無音訊。（本文關于隱元生平的敘述，除注明者外，均采自隱元自述的《行實》及性日、性

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com